

持ちこまれたのではないか、という考え方一般に承認されている。

中世ロシアの占卜書「ラフリ」について

中村喜和

はじめに

十六世紀の初め以来ロシアに「ラフリ」と呼ばれる占いの書物の存在したことがしられている。それは当時の文献「家庭訓」と「百章」の双方においてキリスト教徒には有害なものと判定され、禁書あつかいをされてきた。

「ラフリ」という名称の由来をたずねれば、それはギリシヤ語の *papulion* から出た言葉であり、さらにさかのぼればアラビア語の *raml* (砂、謎) に到達する、という説が十九世紀以来定説のようになっている。⁽¹⁾

右にあげた二つの文献の中で、「ラフリ」は「アリストテレスの門」と呼ばれる書物と並んで挙げられている。後者は古代ギリシャの哲学者に仮託された占卜書であつたらし。十五世紀の末ごろからノヴゴロドで「ユダヤ派」と呼ばれる異端運動がおこったとき、これらの書物がロシアに

本稿は中世ロシアの一社会事象として「ラフリ」の内容を紹介することを目的としている。事柄は些細に見えるが、その背後にはロシアとビザンツ、さらには地中海世界や西ヨーロッパとの文化的なつながりという下地のあつたことがよくわかる。

(1) 後述トウリーロフらの論文で A・ヴェセロフスキイはじめまる「ラフリ」研究史の簡単な紹介が行なわれている。

一 「家庭訓」は十六世紀の初めに商業都市ノヴゴロドで成立した「第一編集」と、ノヴゴロドの出身でモスクワエストルの手になる「第二編集」の二つの系統の写本が存在するが、前者では第八章、後者では第二十三章に「ラフリ」への言及がある。いずれも「キリスト教徒は病いとあらゆる不幸からいかに免れるべきか」と題された章で、その中で「ラフリ」は、妖術、魔術、幻術、星占い、まじない、カラスの鳴声占い、のろいかけ等々の「あらゆる悪魔の奸計」もろとも、キリスト教徒のタブーとして挙げられているのである。⁽¹⁾

(1) 第一編集と第二編集はそれぞれ最近になつてペ

テルブルグのコーレソフ教授らによって刊行され、一般の読者に近づきやすくなつた。B. B. Колесов и др. *Домострой*. M., 1990; B. B. Колесов и др. *Домострой*. M., 1991. 日本語訳としては佐藤靖彦氏による「ロシアの家庭訓(トヤストロイ)」新読書社、一九八四年、がある。

二 「百章」は一五五一年にモスクワで開かれた宗教會議の議事録である。その第四十一章の中の第十七問として、イワン四世が次のように問い合わせている。これは「ラフリ」の性格をよく示す内容をもつてゐるので、長さをいとわず引用しておく。

我ら正教國では争いは裁判で裁くことになっているが、中には相手を誹謗中傷し、十字架や聖像に誓いの接吻をしてから決闘を行ない、血を流す者がいる。そのさい、悪魔の唆しによつて占い師や妖術使いが彼らに手を貸している。つまり、彼らは魔術を使って「アリストテレスの門」や「ラフリ」で占い、星や惑星を見て決闘の日時を選んでいる。かかる魔術的所業によつて彼らは俗界を惑わし、人々を神から引き離すのであり、その結果、中傷者は魔術に望みをかけ、和解することなく十字架に接吻して決闘し、相手を誹謗中傷した上で殺し合つてゐる。⁽¹⁾

三 念のためにひと回。「家庭訓」の編者ならびにイワン四世が「ラフリ」や各種の魔術を非難したからといって、彼らが近代的な意味での合理主義者だったわけではない。イワン四世の父方の祖母は東ローマ帝国最後の皇帝コンスタンチノス十一世の姪ゾエであった。ゾエは父親の亡命先のローマから、モスクワのイワン三世のもとに嫁いできたのである。彼女はロシア風に名をソフィアと改め、夫の先妻がのこしたイワン大公とその子をさしあて自分の生んだワシリイに皇位を継がせるべく、熱心に運動した。手段をえらばぬ強引さのおかげで、その企みは成功する。イワン四世の論敵クールプスキイが後世に伝えた「ギリシャ

の魔女」という評判は、彼女の生前からあったものらしい。イワン四世の母方の祖母アンナ・グリンスカヤも魔女と呼ばれた。一五四七年のモスクワの大火灾がアンナの魔術のせいとされ、暴徒から追求されたのである。

雷帝と呼ばれたイワン四世自身、みずからの身辺に「魔術師」たちをはぐらせていた。臨終が迫ったとき、彼らに「占算」させて死の時刻を知らうとしたことが、当時モスクワに滞在していたイギリス人ジョン・ローマ・ホーシイ卿の手記の中に述べられている。⁽¹⁾

- (1) L. E. Berry, R. O. Crumley, *Rude and Barbarous Kingdom. Russia in the Accounts of Sixteenth-Century English Voyagers*. Univ. of Wisconsin Press, 1968, p. 307.

である。

といふや、一九八五年にモスクワの二人の研究者トウリローフとチュルネツォフは長大な論文を執筆し、新たに自分が刊行したテクストにもとづいて、「ラフリ」は同時代の西ヨーロッパで知られた占星術(geomancy)にはかならないという説を発表した⁽¹⁾。一般に占星術とは、一握りの砂を地上にこぼしたときの形や、紙上の任意の点をつけいで出来る图形によって運勢をあてる占いである。

トウリーローフらの紹介している「ラフリ」はサイロロを用い、ある平面をさまざまに区切ってそれぞれの枠にあらかじめ番号をつけておく。番号のかわりに何らかの記号でもよい。その平面に骨片を投げて、落ちた骨の数字ないしは記号を得て、番号を占うのである。トウリーローフらの考えでは、この占いは古代のペルシャあるいはユダヤに起源をもち、ボーランド経由でロシアにもたらされたものらしいといふ。十七、十八世紀にはロシア国内のもろもろの修道院で大いに流行ったようである。

- (1) A. A. Турилов, А. В. Чернов, Отреченная книга Рафли. Труды Отдела древнерусской литературы. Т. XL, Л., 1985, стр. 260-344.

たばかりか、本人は鉄の足かせをはめられて一年間の苦役に服せしめられたという。

十九世紀半ばのフィリピンの時代にはもはやその種の懲罰を課される恐れはなかつたが、それでも編者は用心をかく次のようなコメントをつけ加えている。「この写本で語られる占いは、われらの祖先たちの迷信の名残り、あるいは眼つぶしのための荒唐無稽なつくり」とにほかない」。フィリピンによるテクストは、上述コレソフ編の一九九〇年の「家庭訓」の末尾にそのまま再録されている。本稿末尾の邦訳の底本として利用したのもこれである。なおこのテクストには何かの理由で欠けている箇所があり、それは「[]」であることを示した。

- (1) *Памятники старинной русской литературы*

Вып. 3, Ложные и отреченные книги русской старинны, собранные А. Г. Пыпиным. СПб., 1862, стр. 160-166.

四 「ラフリ」のロハニア語テクストは一八六一年にペテルブルグで出版された「中世ロシア文献集」第三卷の「アレクサンドル・パイピングの収集になる中世ロシアの偽書・禁書」にはじめて印刷された⁽¹⁾。編者であるパイピングは「十七、十八世紀の諸写本より」も注ついで、一種の合成テクストである。

トウリーローフによれば、一六一八年、リーシャゴロムのペチャルスキ修道院のやむ下僧が「ラフリ」の写本を所有していることが発覚したとき、書物はたちまち没収され

五 フィリピンのテクストによて見るかぎり、「ラフリ」は三個のサイコロを一度に投げるか、それとも一個のサイコロを三度にわたって投げ、田に出た数字の組合せによって吉凶を占うものである。この占いの主たる対象となるのは、健康と旅と家族の和合のことであり、そのほかでは「敵」との関係が問題となっている。イワン四世が「百章」で関心をもつたのは、もっぱら最後のテーマだったのかも障りなし。吉。

六六六 海面に光かがやき、この日は明るからん。人びと、すべての正教キリスト教徒は啓蒙の日々を喜び迎える。汝もおのれの運を喜ばん。願い」と、のこらず首尾よく叶う。旅には出るがよし。家のこと、敵のこと、これらは「敵」との関係が問題となっている。イワン四世が「百章」で関心をもつたのは、もっぱら最後のテーマだったのかも障りなし。吉。

六六五 光かがやき、この日は明るく、人びとは喜ばん。ダビデ王の語つたとおり……。汝もおのれの運を喜ば。

六六四 神は汝の望みと願いとを助けたまう。ダビデ王の語つた言葉のとおりである。病いは軽し、すぐに起き出でん。家内よく整い、失せ物出でん。吉。

六六三 願い」と、思いどおりなるべし。ダビデ王の語りしごとく「誓い立てればそら」となし。汝の願い」と、すべて叶う。病いあれば、祈禱をため。神は健康を与えられん。死と不測の事態の恐れあれば、神はよき道を示されるであろう。

六六二 おのれのあらゆる福を神に願いたければ、貧者に施し物を与へよ。家中を悪魔がかきみだし、家族のあいだに和合なし。家は火を出して燃えており、八方ふさが

り。
六六一 汝は光から闇にふみこもうとしている。何に
望みを託してか。ダビデ王の語りしことは、「主イエス・
キリストは正義なり。まことを愛でしがゆえに」。汝も悪
よりはなれ、惡の声に耳をかたむけるな。いざれ良きこと
あるべし。病い、旅、金錢のこと、ならびに敵について、
用心が肝要。凶。

六五五 この答は汝の心にかなうべし。汝の願いごと
はダビデ王の語りしことく、「わが敵はあざむかれ、重き荷
をわれに負わせた」。されば、汝はおのれの悲しみを神に
ゆだねよ。心軽くならん。病いはすこやかになり、家の中
に神やどるべし。旅、つつがなく道中はかどる。敵は相手
こそ汝を恐れている。神に祈れ。

六五四 この答は汝にとつてにがく、汝を悲しません。
心当るふしあるや否や考えよ。もしあれば、「われに耳を
おし当てよ」というダビデの言葉どおり聞きとること。さ
れば汝はそしらぬ顔してしばらく待て。病いは重くとも死
ぬことなし。旅は立たぬがよし。敵を恐れよ。かたわら
にあり。

六五三 鹿の角をつかまんとしても、鹿は野に逃げ去
つて久し。汝はことをおこすのを延ばせ。考えはよし、時
期は尚早。

六五二 一方を見れば、ティベリアスの海(ガリラヤ

し。家に異変なく、旅は障りなく、敵は相手こそ汝を恐れ
ている。

六四二 助言者が甘言をもつて何を得んとするか、わ
れらにはわからぬ。汝の敵がすぐかたわらにあって機会を
ねらっている。これを解けば、家内に不満昂じて和合なし。
汝にとつて好ましからざる卦。

〔六四一～六三二欠〕

〔六三一～六二一欠〕 旅は道中よろし。悲しみが汝をおそ
うとも、最後は喜びをもつて終わらん。

六一二 旅はよし、されど罪あり。主は、汝の願いを
叶えられるに病いをもつてすれど、祈りによつて神はその
病いをいやしたまわん。耐えれば、良きことあるべし。幸
が不幸に打ち勝つ。このことについては自分の頭で考え、
行動せよ。敵をさがし当てれば、解決かなう。汝の受けと
る賄賂は常ならぬもの。

六一一 町は石づくり、柱は鉄、銅の門はかたく閉じ
られている。危険を冒すな、おのれの魂を破滅させぬよう。
悪からしりぞき、善をなせ。助言にはしたがわぬがよし。
病いにかかるは死ぬ。家のことは骨片の示すとおり。旅に
は立つべからず、あまたの暴力をうけるであろう。敵を恐
れよ。

六一 一 ティロンの聖テオドロスが鷹を連れ馬に乗っ
て野原におもむいた。鷹が鷹をつかまえ、テオドロスは上

湖)、その底は銅の色をしている。主はこの海でおぼれか
けたペトロを見かけた。ペトロは大声で叫んだ。「主よ、
主よ。海底からひき上げたまえ」。主はペトロの願いを聞
き、天から下りてペトロを海底から救い出された。ペトロ
は主の光を見て喜んだ。されば汝はおのれの運を喜べ。病
いあれば、主は強壮な健康をさずけられん。家中に福あふ
るべし。敵を恐れるならば、神に祈れ。

六五一 使徒ペトロが歩んでいたとき……大いなる災
厄をくだし、地上にも草のあいだにも豊かな葉やいかなる
木の実もなくなるならば、占いの示すところは凶。病いあ
れば、それより死に至り、家の中には悪臭紛々。旅は災難
を恐れよ。敵に用心せよ。凶。

六四五 大鷹が雀をつかまえた。雀は大鷹の爪からの
がれんとするが、身をふりほどけない。されば、汝は他人
の手からのがれんとするな。かねての企ておこさぬがよし。
大鷹が雀をひきさくは恩を着せるにあらず。家中に大いな
る窮乏あらん。病いは重く、死おとずれるべし。新しき場
所に移りたくとも、行くな。出かければ災難に逢わん。敵
を恐れよ。

六四三 主が人に言われた。「ありとあらゆるもののが
汝にゆだねられている。知恵と技芸が地上の汝に与えられ、
空飛ぶ鳥と水を泳ぐ魚が汝の手中にある」と。これを解け
ば、病いは長いわざらいののち、神から健康をさずかるべ
たん。

五五五 アブガル王が病の床にあつたとき、主はこの
首尾に歓喜した。同様に汝はおのれの運を喜ばん。神が汝
を助けたもう。病い、旅、ともに喜びあり。借財を戻せば、
汝もまたわざらわしさあれども受けとるべし。敵に打ち勝
たん。

五五四 願いごと叶い、心は満ち足りん。「主よ、狡猾
な者よりわれを救い、邪まなる者から救いたまえ」とダビ
デ王の語つたとおりになるであろう。病いは去り、家内和
合、旅つがなく、失せ物出ずべし。旅はつつがなし。

五五三 ある巡礼が神の使徒のもとにおもむき、栄光
の宝座に近づいて、分別をさすけられんことを執拗に祈つ
た。病は癒え、家内に不足はないが、旅には出るな。その
わけは、敵があつて汝に悪を企んでいるから。

五五二 汝の考えることは罪多く、益が少ない。我執
を去り、私心を捨てよ、されば良きことあるべし。さもな
ければ、災いあらん。災いをこうむるのは、我執が邪悪な
ゆえである。病いは死にいたり、家内は何ひとの手にも負
えぬ。

五五一 主がサマリヤの女のもとへ来て、飲み水を乞

うて言われた。「女よ、わが贈り物のことを知りたれば、汝は生き水を与えるものを」と。女は主が現われ、大いなる贈り物をさずかることを歓喜した。同様に汝もおのれの運に喜ばん。病いあれば、すこやかにならん。家は整い、敵は汝を恐れている。

五四四 われらの主イエス・キリストがベツレヘムで生まれたその日、東方にかがやく星があらわれ、全世界を照らした。こうしてすべてのキリスト教徒が神の出現に歓喜した。同様に汝もおのれの運を喜ばん。病いはまもなく癒え、家の中に足らぬものなし。新居への移転はしばらく我慢せよ。さすれば上首尾の見込みあり。

五四三 銀と鉛をいっしょに量るのはよくない。かかることをなきぬよう、汝も神に祈れ。汝の考えは正道に向いていない。病いあれば、重かるべし。旅には出るな。道中に死あり。敵が危害を加えようと企んでいる。凶。

五四二 われらの主イエス・キリストが使徒たる弟子たちをしたがえてタボルの山に登られたとき、主は水を含んだ雲を祝福してワインに変えられた。弟子たちは主の御業に歓喜した。同様に、汝はおのれの運を喜ばん。神は汝を助けたまわん。病いあれば癒え、家内に足らぬものなく、旅の道中は安全。悩みあれば消え失せるべし。吉。

五四一 天の御使いが声を出して告げた。「女よ、立て。死が近づいている。汝の子を連れてエジプトの町に去

助けあらん。病いも家内のこともすべて順調にいく。

五二二 神が汝に道を示され、何ごとにおいても汝に成功と神の恵みと恩寵あらん。ダビデ王が「汝は家畜と人びとのため」と語ったごとくである。同様に汝の願いごと、まずは銀、第二に利得、いずれも叶えられ、旅に出でては人にあがめられ、神の助けあらん。心ひそかに願いたることすべて首尾よく成就、望みどおりに福を得ん。

五二一 主イエス・キリストのため汝の祈りは欠かされぬ。汝は大いなる利得と心の喜びを得るべし。家内のことならば、悲しむには及ばない。よく整っている。道中はよし。酒宴に出会い、人びとから名譽を受けん。

五一 時をきめ、旅に出るばかりに準備せよ。ダビデ王の語ったごとく、「わが身を守り、憐れみたまえ」。同様に汝は心を強くたもて。神は汝をあらゆる悪から免れさせたもうであろう。悲しむな。ことは汝の思いどおりにはこび、見通し開けん。汝のもくろみはよろし。

四五四 時がきて、汝のわざは成就するであろう。「もろもろのことわれに向かいであつまる」とダビデ王が語つたとおりである。されば汝は用心せよ。敵は汝のかたわらにあって機会をねらっている。旅は無益、よきことなからん。凶。

四四三 二羽の鳥がティベリアスの海を横切って飛び、おえる桺の木の頂に巣をいとなみ、つくった巣でひな

れ」と。女は子が死を免れたことに歓喜した。同様に汝はおのれの運を喜ばん。病いあれば、すこやかにならん。祈禱をたのんで他のもろもろの災厄からも免れるべし。主が汝をあらゆる災厄から救われるのである。吉。

五三三 聖使徒ペトロとアンデレが海に出て主の言葉どおり網を投げたとき、主は多くの魚をさしきられ、網をひかずとも、主は小舟を魚で満たされた。主はその後も約束されて、それ以上……同様に、汝の願いごとすべて喜びいていい。病いあれば、重かるべし。旅には出るな。道中に死あり。敵が危害を加えようと企んでいる。凶。

五三二 海に船がうかび、大勢の人が航海していた。各自多くの財物をもっていたが、恐ろしい嵐がおこり、大波が船を岩にたたきつけ、こなごなに打ちくだいた。多くの人びとが死に、すべての富が失われた。汝の運もこれにひとしい。汝はだれかれとなく人を愛しているが、親切に対して受けるのはあだのみ。家内に幸せなく、それを願うもおろかなり。凶。

五三一 明け方、香油をたずさえた女たちが泣きながら主の墓をおとすれ、かたわらの石にすわっている天使を見た。天使は彼女たちにこうたずねた。「死者のあいだに生者をさがすのか。キリストは三日目によみがえった」と。女たちは主がよみがえられたことに歓喜した。同様に汝もおのれの運を喜ばん。何ごとであれ、汝の願いごとに神のおりである。旅のこと、家内のこと、病いのこと、すべて憂いは消えるであろう。汝のもくろみは達せられる。

四五二 何びとについても、願いごとを明かすのを恐れよ。なげくべからず。「おのれの悲しみをすべて神にゆだねよ。神が汝の望みを成就せん」とダビデ王が語つたとおりである。旅のこと、家内のこと、病いのこと、すべて運に恵まれ、敵に打ち勝ち、力にあふれて立ち上がる。病いと転居よし。敵は恐れるにおよばず。念願すべて成就。四三三 兎が草の上を駆けていき、戻にかかる。だが戻から身をぶりほどき、かなたの森へ一目散。兎は自由の身に歓喜する。汝もおのれの運に喜ばん。何ごとにおいても神は汝を助けたもう。病いならば、まもなく床ばなれ。逃亡した奴隸は戻り、失せ物が他人のもとから出る。神は何ごとにおいても汝を助けたもう。

四三二 何ゆえ貧窮にあっておのれの知恵をためし、流れに逆らつていかなる利得を得んとするや。わが身の性に用心せよ。生ずる利益は大きいが、汝は多くを望みすぎず。そのような利益から死まではほど遠からず。旅と家内のことならば用心にしくはない。凶。

四三一 何ゆえ汝は我執にとらわれ、意地をはり、益

もないことにこだわるのか。世のため人のためを思い、神に祈るのが身のためではないか。悪を去り、善をなせ。邪に仕えるならば災いおとすれ、病気もなおらないだろう。

借財を返せば、汝も貸したものを受けとらん。ただ、わざらしさはあるべし。まもなく良運に恵まれるはず。

四二三 つばくらが餌を求めて東から西へ飛びながら、汝に良き知らせもたらさん。すなわち、汝は事業に成功し、敵どもはおとなしくなり、汝は力にあふれて立ち上がるごとであろう。ダビデ王が「主よ、わが魂を惡とあらゆる敵たちから救いたまえ」と語ったごとく、神を頼め。旅と仕事、急ぐべからず。願いごとほどなく叶うべし。

四二一 それゆえ汝よ、大地がふるえ、大海原の海底で濁り水がざわめき逆巻こうとも、恐れるな。胸の中で育んだ考えを臆せずに述べ、節を曲げぬがよい。ダビデ王が「神こそわが頼みの綱と力」と語ったとおりである。されば事にさいして神に望みをかけよ。すべて思いどおりにならん。旅と新しい場所へは行かぬこと。自分の考えを捨てず、ふたたび運を占え。

四二二 主が弟子たちとともに船でティベリアスの海をわたっていきたとき、嵐がおこって荒波が立つた。船にいた弟子たちは悲しんで神に祈りはじめた。すると主が立てて海の風を静めた。海はたちまち凧ぎ、弟子たちは主の御業に歓喜した。同様に汝はおのれの運を喜ばん。願いごとは順調、病い癒えん。

荒地は人の住まいとなり、谷間に丘が連なり、それは小麦の粒さながらにおびただしく増え、人の名を呼んでほめたたえる。汝の願いごと叶うべし。ひたすら神に祈れ。仕事は順調、病い癒えん。

三一 神よ、汝の道がよみがえった。人よ、汝の道もととのい、門は開かれている。ダビデ王の語ったとおり、「われを助ける者は天と地を創られし神なり。」かくて、汝の願いすべて叶う。旅には喜んでたて。ほかのこともすべてよし。吉。

二二二 主がわが主人に言われた。「汝の敵をひざまずかせるまで、わが右手の側にすわれ。汝の敵が足もとにたおれるであろう。もし領地を手に入れ、よき人びとと交わることを望むならば、しばし耐えよ。主みずからユダヤ人の仕打ちを耐えたように。汝も同様である。事は

すべて叶う。旅は障りなし。

三三三 仕事よし。主は汝の願いを叶えられん。ひるまぬこと。今まで親しくなった者と親しむな。あざむかれぬためである。決心はすぐにつけぬがよい。人にゆずれ。それは難事にあらず。思いまとわぬこと肝要。新規にことをなすな。病いの恐れあり。病い回復は望みなし。

三三二 モーゼはエジプトからユダヤ人を連れ出したとき、自分の杖をふるつて紅海を二つに分けた。ユダヤ人たちは海をわたつたが、エジプト人たちはのこらず水にのまれておぼれ死んだ。これを解けば、兎が逃げ去り、獵師がおぼれたにひとしい。敵に用心をおこたるな。旅と新居へは出ぬがよし。凶兆。

三三一 レバノンの杉より高い人を見て、近づくと影もなし。さがせども、見つからぬ。仕事は順調、神に望みをかけよ。敵は汝から逃げ、汝は敵に打ち勝つべし。されど、汝の考えは益なし。まどうな。別の卦の出るまで待つがよし。

三二二 したがつて、汝は海をわたることを企てたれど、そのゆえんを知らず。露の間待て。幸運と神の恵みあらん。ただひたすら毎日毎時、神に祈れ。願いごとかならずや叶い、首尾よからん。

三二一 すべては汝の手にゆだねられてあり、汝の畑は汝の飢を満して償いを求めず、汝の家を富ませ、美しき心せよ。心によき考えのみをもつこと。

二二一 もしも汝に悪しき敵あり、彼らが羊を襲う狼のように汝をつけ狙い、汝を不意に食い殺そうとしていれば、神の恵みを得て、剣と盾をとれ。罪をおかさぬよう戒心せよ。心によき考えのみをもつこと。

二二二 ある愚か者が心の中でこう思つた——「人はみな放蕩をしている」と。汝の魂は放蕩を好み、仕事は成就するとも、思いは海の波さら、あなたこなたにただよつていて。考えを改めよ。死を警戒せよ。凶。

一一一 神に祈れ。汝の願いごとを神が助け、叶えられん。されど心に完全な愛をいただくべし。人は善行の中でのみ愛を保つものだからである。愛なくばすべてはむなし。始めよければ、終りに益あり。

(一橋大学教授)